

仰向けの状態で、私は目を開く。記憶と五感が無理に繋ぎ合わさって、夢から醒めたような、そんな感覚だ。

「フーツハツハツハツハ！ ついに完成した！ CO-1A、君は自己意識を持つ化学の結晶！ 我らガイナスの為に、殺戮を行うのだ！ そして今ここに、二つの世紀の発明が実証された！」

一人は高らかに笑い、自画自賛を吐き散らす。周囲の科学者たちも、悪意の笑顔に満ちている。

私は科学者に苛立ちながらも、身体に繋がれた不快なコードを引きちぎる。私は実験台から降りて、最も不快な人物の前に歩み寄る。科学者は続けた。

「おっと、君が逃げ出そうとするならば、このスイッチで君の身体に埋め込められている爆弾を爆破させる。君のフレームは六十口径の拳銃でも破れないだろうが、中からの強度は非常に脆い。トチ狂っても、逃げ出そうとは考えるなよ、ハハハッ！」

何を言っているか理解は出来るが、聞いていたくはない。私はその科学者の手を掴み、自分が思っている以上の速さで唯一の危険物を取り上げた。そして天を仰ぎ、純白の空間に言葉を吐き捨てる。

「全員、死にたいの？」

怯えた顔をする科学者に、苛立ちと優越感を感じた。自然と動いた手は、いつの間にか科学者を床に這わせていた。

居心地の悪い場所から抜け出し、扉を切り裂きながら進む。

私は世界初の自己意識を持つロボット、とは名ばかりの殺戮兵器として誕生した。

容姿は若い女。空色に染められたショートカットの髪。小ぶりの胸に、均等のとれた動き易い身体。硝子のように透き通る肌色。世界初の自己意識を持つロボットがそんな煌めく容姿なのは、悪趣味ささえ感じる。

科学者の脅しは、何の意味も無かった。計算上、爆発がある程度の広範囲に及ぶことは分かりきっていた。人の上に立つだけの科学者に、易々と爆発させられるものではないはずだ。更に、私は命が惜しいという人間らしい心は、生憎持ち合わせていない。人型で自己意識があるだけで、私は機械だ。死を恐れることも無いし、研究所一つ程度、情もななく消してしまえる。私はその時、冷酷な、残虐な、人と呼ぶに相応しくない「モノ」になっていた。

屋内が屋外に変わり、青い空が見える頃には、人の山。いつまでも不快な場所に居たく

はないので、少し高い丘へと上る。記憶の隅に生きた、ロボットの三戒とやらを嘲笑いながら、景観の失われた研究所を見直し、科学者のように高らかに笑った。

◇◇◇

私が生まれたのは、エシユナイダルという国だった。

話は、八年前に遡る。

エシユナイダルは、エピロント地方で最大の領土を誇る国だった。古い考えの多いエピロントで、唯一民主的、平和的な国だった。そんな平和主義の国は、私には割と居心地が良かった。しかし、エピロント地方では平和主義は浮いていて、周りに良く思われていなかったのも事実だ。

そして隣国のガイナスは、武闘派で独裁政治。武力で領土を拡張、最大領土のエシユナイダルを狙うのも時間の問題と言われていた。

その両国は、日に日に敵意を増していった。エシユナイダルも「平和的解決」という自己正当化だけで、目に見えてきた戦争から逃げていた。

私は当時、十二歳だった。オブリックという村で生まれ育った私は、可もなく不可もなく、といった感じの子供だった。しかし、家族三人、幸せな日々を過ごしていた。

オブリックは、ガイナスとエシユナイダルの国境近くにあった。戦争を知らない十二歳の私は、楽観視しながら二つの国の経過を見ていた。

そして、戦争が始まった。別段、宣戦布告があつたわけではなかった。ただ最初に狙われたのが、オブリックだった。

忘れることはできない。あれは、2345年、8月15日のことだ。朝日の昇る頃だったが、空は赤黒かった。

オブリックはその日、火攻めにあつた。相手は言うまでもなく、ガイナスだ。燃え盛る家に、戦意のない人の殺される姿。そして目に映る惨死体。それは地獄絵図という言葉以外、出なかった。

私は、その情景を眺めて足を震わせることしかできなかった。お父さんは私とお母さんを逃がすためにガイナス兵と対峙する。それは、きつと時間稼ぎでしかなかっただろう。お父さんの仕事は何かについて研究する仕事だった。しかし、炭素が何々だとか、私には理解できなかった。だから運動神経が良くなかったし、あまり運動は好まなかった。父さんは、別れ際に「いつかまた、皆で湖に遊びに行こう」と言った。その日は、近くの湖で遊ぼうと言っていたからだ。涙で滲む父さんの顔に、私はかける言葉が見つからなかった。

そんな私の手を引き、お母さんは走った。私を守ろうと、私を励まして、私の手を引いて必死に走り続ける。逃げているたった数分が、何時間にも思えた。必死に逃げた丘で、ふと立ち止まった母さんは、走つてと叫んだ。私は走りながら何度か振り向く。お母さんは最期まで笑顔で、「強く生きてね」と口が動いたように見えた。

次の刹那には、お母さんの身体が斜めに割れて、火に包まれる村が見えた。

「——お母さん！お母さん！」

お母さんの願いは塵となり、私はその場に崩れ落ちた。ガイナス兵士は私を見た後、逃げ的意思がないことを確認すると、剣を鞘に仕舞った。そして、硬い籠手のまま私を引きずった。

「いたい！やめて！」私は心から叫んだ。張り裂けそうな声を上げ、無駄な抵抗をした。「この時、初めて痛みを感じた。色々な感情が私を取り巻く。バカだ。私を守ってくれたお父さん、お母さんのことを、微塵にもわかってなかった。私は私で、人の気持ちなんてわかっていなかった。

普段は全然動かないのに、私を守るときだけ真っ先に動いたお父さん。何よりも誰よりも私の事を考えて私を守ろうとしてくれたお母さん。そして、二人の約束を一つも守れなかった私。二人とも、今もどこからか見ているのだろうか。娘の人生を嘆いているだろうか。それとも、優しい二人だから、自分を責めているだろうか。走馬灯のように流れる思いに、私は死を予感した。

暗闇に落ちる意識を俯瞰して、私の人生は一度、幕を閉じた。



いつも鳴り響いていた目覚ましに、聞こえるトントンという調理の音。脳で再生されただけの音声が、私の頭に反響する。しかし、目に映るのは映画で見る牢獄のような部屋。暗い部屋の壁にもたれかかり、息を吸って、吐いてみる。身体は至って正常なはずだが、意識は朦朧とする。その中で、両親の死を記憶から掘り出す。しかし、思い出したくない。全部夢ではないかと思いたかった。

そんなことを考えていると、兵士のような風貌の男が、鍵を開け私の前に立った。私はその男を睨むと、「反抗的な眼だ！」と、ナイフで指を一本飛ばされた。痛み歪む私の顔を、その男は傑作だと笑いながら顔を蹴り飛ばす。更に痛みを苦しみ泣き散らす私を、食糧と一緒に乱暴に檻に入れた。

その日から、地獄は始まった。

反逆心を持たせないため、人との接触も避けられた。そして兵士が日に一度、鞭を振るってくる。痣は全身に残り、骨は歪み、頭は視界を薄っすらと映すのみになる。

それを約八年。私は極限まで機械に近く、人ではない何かになりつつあった。部屋にはデジタル時計が一つあるだけ。その年月の感覚だけが、過ぎている日々を実感させてくれた。

いっそ機械なら……そう、何度も思う。ただただ、この締め切られた世界から出て、自由が欲しかった。

苦しみから放たれたのは意識的にはつい先ほど事だ。私は極限まで苦しみ、ついに死を決心した。

八年もの年月を耐え忍んだ理由は、両親だ。私を守るために、必死になってくれた二人だ。いつか、いつかと希望を抱いていた。私が二人の骨を拾ってあげると、些細な、儂げな

願いを。

しかし、それも叶わない。少し考えてみればわかることだ。ガイナスかエシユナイダルが敗戦を認めれば、囚われた私たちの首は飛ぶ。

最期だけは私の意志で、私の命を断ちたかった。自分が持っていたすべてを、ガイナスに消されてしまったから。私はゆっくりと首に手をかける。苦しみも感じない体から、漏れる白い息と、なぜか溢れ出した青い涙は、いつからか失った人間らしい私を演出していた。その後のことは、私の記憶にない。意識が戻ったときはもう、身体の表面が金属に挿し変わっていた。

ただ、運命があるとするならば、私は——ガイナスに復讐するために生まれたのだらう。

そして、数十分後。

「……………」

理解できない。さつきまで街が見えていたはずなのに、なぜか森に迷い込んでいた。

「最新鋭のロボットなのに、なんでナビゲーションシステムがないの……………」

傍を見回せば、いろんな動物がいる。犬や猫、狐や猿やパンダがいる。

「フアンタジーすぎるでしょ……………」

試しに、近くにいた猫を触る。なぜか猫は逃げない。猫が好きなのではない。私はロボットだ。動物などが、好きなわけではない。私は座り込んで、猫を膝の上に乗せてみる。それでも逃げないので、撫でてみると気持ちよさそうにお腹を向けた。

動物ではない何かの気配を察知*58して、自我に戻る。顔をあげると目の前に人がいた。猫が逃げなかった事を考えても、人が来る可能性は十分あったのだが、考えが回らなかった。その男は童顔で若く見えるが、落ち着いた雰囲気をもっていた。服装はラフで、少し薄汚れている。

「何してるの？」

彼は優しい声で、私に声をかけてきた。顔に似合った、高い声だ。私は何か言おうとしたが、何も思いつかない。何より、会話するのは8年ぶりなのだ。思うように言葉が出てこない。

私が呆然と猫を抱えていると、彼は話を続けてくれる。

「猫が好きなの？僕もここが好きだね。毎週、いや、毎日かな？はは……まあ、よく来るんだ」

そう言っと、彼は背中を向けて笛を吹く。森にいた動物が彼の前に集まってくる。

「ホー………」

私は素直な感情を口にする、彼は笑顔になって子犬に手招きをする。子犬は息を荒らげながら近づいてくる。そして慣れた手つきで子犬を持ち上げると、近くの石に座り、犬を膝の上に乗せた。

「もう何年とここに来てると、なぜか集まるようになってきたんだ。そうだ、名前は……はい」

彼は胸のポケットから名刺を差し出してきた。私は猫を支えていない手で受け取る。そこには、ブライド動物病院院長リュファス・デーソンと書いてあった。

「こんな所に人が来たのはいつぶりかな。最近は何騒だ、街の近くにはあんまり出歩かない人が増えたからね。」

「えっと、私の名前は……」

私も何か話そうと、自分も名乗ろうとする。しかし名前を思い出そうと、過去を辿ると、名前だけ割り貰かれたように思い出せなくなっていた。

彼は訝しげに私の顔を見る。ふと、不快な科学者が言っていた型番を思い出す。あの科学者は、私の事をC-C-I-Aと言っていた。

「……シア……」

様子を窺っていたリュファスは、少し顔を綻ばせた。

「ふむ、シアさんか。シアさんはどうしてここへ？」

私は街に案内してもらおうかと考えた。しかし、ガイナスの人間をそう簡単に信用していいものなのか。ただ、それだけが私の思考を詰まらせていた。

「少し迷ってしまっ……一番近い街まで行きたいんだけど」

そして、私はリュファスを一時的に信用してみることにした。彼は首を傾げながらも「そうなのか、じゃあ僕の街へ案内するよ」と、笑顔を絶やさずに私に言い放った。

彼の案内で街へ行くことは、問題なく遂行された。しかし……

「なんでこの子が付いてきているの……」

街には着いたものの、叫びたかった。『この子』というのも、先ほど撫でていた猫だ。どうやら、懐かれてしまったらしい。

リュファスはその様子を見て笑って「昼の三時ぐらいに僕の病院に来てくれたら、診察するよ。その子、前からあそこに住みついていてね。異常はないか、見てみたいと思ってたから」と言った。その時、街にある時計は十二時半を指していた。

私はその猫が悲しそうな顔をするせいもあって、なんとかして飼ってあげたいと思い始めていた。その事を伝えると、彼は「それはよかった」と言って、安堵の表情を浮かべた。

そして彼は急用があるらしく「隣は僕の家だから、よかつたらゆっくりしていいよ」と言い残して、足早に病院に駆け込んだ。

その間は、リュファスの家で地図を借りた。正確には、リュファスの妻のエリーナが貸してくれたものだ。エリーナは落ち着いた雰囲気を持ちつつ、それでいて明るい、そんな女性だった。エリーナからは地図と一緒に、「ドーナツを貰った。私は食べる意味がないので、その場を離れて木の下に座る。そして猫にドーナツを食べさせると、半分ほど食べると眠くなったのか、その場で眠りだした。私はやれやれといった様子で、そこで地図を開く。

その地図によると、「ここはガイナスの都市部から離れたブライドという街のようだ。ここから東に四十キロほど行けば、オブリックに着く。その間には、山を越えたあたりでエルシスという街がある。

地図の端を見ると、2345年3月に作られたものらしい。ちょうど、戦争が始まった年だ。思い出して、また感傷にひたる。

眠る猫を見て、名前を付けてあげないと、と思った。そして、唐突に思いついたララと名付けた。

午後三時になったところで、リュファスの病院の近くで休んでいた私は、寸分違わぬ時間に病院に入った。

「やあ、待ってたよ。さつきは急用で、すまなかったね。一応、ここに色々書いてくれるかな。」

リュファスが矢継ぎ早にそう言うと、小難しい書類のようなものを手渡してきた。

「……分かった」

私は少し苦しそうな声を出したためか、彼は少し不思議そうな顔をした。その紙には名前、住所、電話番号など、個人情報を書き込む欄があったからだ。

「……何か、事情でもあるの？」

彼は察したように、優しくそういった。もちろん何も話せないのです、私は首を横に振った。

リュファスも、正体を疑っているのだろう。あんな場所で、一人でいた私を。しかも、近くの街を知らないときている。私自身、そんな人物を見れば怪しむだろう。しかし、もし正体が露呈してしまっても、この人なら何とかなるかもしれない。そんな事を思いながらも、念には念を入れなさいといけないのも事実だ。

「書き終わった。はい」

情報はほとんど偽装だった。記憶通りに書けば、故郷のものになってしまうからだ。

彼は紙を受け取ると、少しクスツと笑った。見られた時点で偽装ということは気づかれていたのかもしれない。しかし気にも留めないのか、その書類の事項をリユファスは埋めていった。私に理解できるのは、日付ぐらいだった。

「えっ……」

私はつい声を上げた。そこに書かれた情報が、私を戸惑わせた。

「日付がどうかした？ 今日八月十三日だけど……予定があつたとか？」

「いや。何でもない。何でもない……」

それは、信じがたいことだった。しかし、間違えるはずがない。あの数列だけは、私が忘れるわけがないからだ。

そこには、2345年の8月13日と、見紛うことのないほど、ハッキリと書かれていた。

☆☆☆

ララの診察が終わった後、すぐ病院から出た。時刻は午後四時を過ぎている。夏の日差しはなお強いが、温度が認識できない私はそれほど夏を感じない。

あのあと。診察が始まって大人しくしている間も、心が穏やかではなかった。

何かの影響で、今は戦争が始まる二日前だ。それはつまり、昔の自分と家族を救えるかもしれない、ということだ。

しかし、そうしてもいいのかという不安がよぎる。私が歴史に影響を与えることで、どう未来が変わっていくのかわからない。

次第に感情が芽生える。様々な想像が膨らむ。

今、存在する本当の私はどうなっているだろう。

いや。違う。

私は本当の私ではなくて、ロボットとして存在している。つまり、本当の私と今の私の間にタイムパラドックスは生じないはず。

宇宙の因果律は、私のようなロボットが一体存在するだけで変化するのだろうか。バタフライ・エフェクトのように、私が存在した世界と私が存在しない世界で、大きく世界は変わるのだろうか。

——違う。

私は世界が変わるとか、変わらないとかそんなことはどうでもいい。

私のこの身体で何が出来るのか。私が生まれた意味は何なのか。

バタフライ・エフェクトでも何でもいい。歴史を変えたっていい。世界がどうなろうと、知ったことじゃない。

ただ、私が守れなかった私の世界を、守りたいんだ。

ブライドとオブリックの間には、大きな山がある。最短距離で抜けるなら、この山を登るしかなかった。運動面では特に不便はないので、単に山を東に超えていくだけだ。

私が帰ると言っていると、リュファスは家に戻ってエリーナを連れてきた。そして、詮索はせずに街の外へと案内してくれた。

「今日は楽しかったよ。ララの」と、よろしくね」

「リュファスはその場所が大好きだから、機会があったらまた顔出してあげてね、シアちゃん」

リュファスとエリーナが街の外に私を見送ってくれた。何も詮索せず、疑わずに愛想をふるまってくれた二人には感謝しないといけない。

「……わかった、二人とも、ありがとう」

私はもつと愛想よく言いたかったのだが、あまりいい印象は与えなかったと思う。ララは、離しても付いてくるようなので連れて行くことにした。

腕に抱えた眠ったララを地面に降ろして、山の中腹付近と思われる場所で地図を開く。エリーナから貰ったものだ。時刻は夜の十一時で、外は真っ暗になっている。私には暗視カメラが付いているので、時間は関係なかった。

山の剥き出しの傾斜に、ポツリと家があった。部屋の電気はほのかに蛍光が光り、少し前まで部屋に誰かがいたことを示している。

その小屋の少し上で、焚き火をしている人が見える。年齢まではわからないが、体格のいい男だ。

「おーい、嬢ちゃん。こんな時間にこんなところで何してるんやー？」

その男は私を見つけたのか、少し崩れた言葉で私に話しかけてきた。二十メートルほど離れているため、声は大きめだ。

「この山をー、越えているー、途中ですー」

私は大きな声を出したつもりだったが、その男は頭に疑問を浮かべた様子だった。ララを抱えてもう一度歩きながら言っていると、男は手を「なるほどー」と言うように叩いた。

私が男の近くに来ると、焚き火の周囲に座るように手でジェスチャーする。

「こんな時間に登山は危ないんじゃないか？ って、猫まで連れとるやん、嬢ちゃん変わりもんじゃない」

「少し急用があつて……エルシスという街に行きたいの」

私がそう言つと、その男は豆鉄砲を喰らつたような顔をする。

「おいおい嬢ちゃん、エルシスは今、軍が占拠してる。隣のエシュナイダルに今か今かと突撃しようとするさかい、危険つたらありやせんぞ。嬢ちゃん、エルシスに用があるんか？」

なかなか理解しにくい言語だが、幸い私の言語認識能力が高かつたようで、ほとんど標準語で理解できた。この男によると、エルシスは危険だということらしい。しかし、本来のオブリックへ行く目的は言えるはずもない。

「生き別れた両親がエルシスにいるの。もう何年も会つてなくて……」

そんなことで騙されるわけがないのは重々承知だが、思いつきで言つてみる。するとその男は、いきなり下を向いて震えた声で話し始める。

「なんやて……危険を承知で両親に会いたいつちゆうんか。なんてええ話なんや……よし、わかつた！ 嬢ちゃん、今日はもう夜遅いからワイの家泊まっていき！ 不便なことやけど、妻がなんとかしてくれと思つわ！ あ、ワイの名前はジョエルっちゆうんや。困つたら頼つてやー！」

「アハハ……」

更に面倒なことになった。私は愛想笑いを浮かべながら、嘘は吐くべきじゃないな、と思つた。

「おいおい……なんでワイの布団が無いんや。カーペットあつても床硬いんやから、布団入れてくれやアリッサ」

「何言つてんのよ、ジョエル。あなたがシアちゃんを連れて来たら、寝る布団が無いのは当然じゃない。私があるの布団で我慢してあげてるんだから、あなたは床で我慢しなさいよ」

「おいおい冷凍庫ぐらい冷たいなアリッサ……減るもんやなし、ええやろ？」

「シアちゃん、こつという人とは結婚しない方がいいわよ。面倒だから」

「は、は、は……」

「みゃー」

「ハハハ、動かないで、ララ。くすぐりたい……」

——修羅場だった。

あれから、ジヨエルがすく心配するので、素直に家に上がらせてもらったのだ。ジヨエルの妻のアリッサはとも勝気な人で、ジヨエルは家に入ってからずっとたじたじだった。しかも彼女はジヨエルと違って鋭く、知的さも持ち合わせていた。

家に入れてもらってすぐのこと。ジヨエルがアリッサに事の成り行きを説明すると、ジヨエルは、アリッサに怯えて「何か話してや！ワイは風呂入るわ！」と震えた声で言い、お風呂へ逃げ込んだ。気まずい空間が出来あがったが、彼女は私を見て「ニコニコしている。「シアちゃん、なんでこんなところに来たの？」

アリッサは開口一番、こんな事を聞いてきた。おそらく、こんなところに来る人は珍しいのだろう。

「両親がエルシスにいるの……だから、山を越えている最中なの」

「そうなの……ねえシアちゃん、事情があるみたいだけど、ジヨエルはそれで騙せても私は騙せないわよっ」

私は言い当てられて下を向くと、いつの間にかアリッサが目の前に来ていた。そしてアリッサは私の顔をツンツンとつついた。

「あ、あの……それはその……あの」

私が完全に思考に詰まると、彼女は得意げに笑ってみせた。

「あそこが通過点で、言えない事情があるってことは、シアちゃん、エシュナイダルに用があるの？ あ、大丈夫よ。私とジヨエルはそういうの、中立的だし」

「い、いや、うーん……」

「通り考えてみたものの、もう逃げ道がないので、自由の意味で領いてみせる。アリッサは急に私を抱きしめてくる。

「あー可愛い！ シアちゃん、こんなおかしなところだけど、今日はゆっくりしてってね」なぜこんなに気に入られているのかわからず、私は彼女の不可解な行動に驚いた。悪い人ではないのだが、強引な姉を持った気分になる。

そのタイミングでジヨエルがお風呂場から出てくる。おそらく、上機嫌な声を聞いて出てきたのだろう。髪は全く濡れていないし、同じ服だったので、お風呂には入っていないようだ。

「ん？ 二人とも仲良さそうやな。アリッサも気に入ってくれたみたいやし、シアちゃん泊めてええやろっ」

と、ジヨエルがとぼけ顔で言うと、アリッサは私に密着させた体を少し離してジヨエルの方を向く。「いいところだったのに……」と小さな声が聞こえた気がしたが、あえて聞かなかった」とこしよう。

「何であなたがシアちゃんを泊める権利を持っているみたいに言ってるのよ。私が決めるのよ、そういうのは」

そう吐き捨てると、ジョエルは「何でワイにはこんな冷たいんや……」と言って静かにお風呂場にフェードアウトしていった。

そんな状況を見て私は、床で倒れるように寝ているララに「大丈夫かなあ？」とだけ語りかけた。ララは、動いたかと思うと呑気そうに腕を伸ばして、お腹を向けてまた眠ってしまった。

アリッサはこの後も、「一緒にお風呂入らない？」「私と一緒に寝る？」などと言ってきて、振り切るのが大変だった。でも、一緒に寝るのは布団を借りないためにもそっちの方が……いや、やっぱり一人がいい。

「シアちゃん、起きてー」

誰かの声が聞こえて、意識が徐々に復活してくる。目を開けると耳元で声をかけるアリッサがいた。

「……おはようございます」

「あはは、まだ眠いかな？」

「の体には機能停止モードがあるようで、意識するだけで疑似睡眠することが出来た。起きていると必要のない」とまで考えてしまいそうだったので、よかったと思う。

起きて周りを見渡す。時計は午前六時を指していた。

ジョエルはまだ床で寝ている。座布団を床に並べて敷き布団替わりにして、昨日アリッサが使っていた薄い毛布がかかっている。アリッサが起きてからかけてあげたのだろう。彼女は私が眠っていた布団を畳んで、背伸びをした。

「さて、シアちゃん。この寝てるのは放っておいて、行くところか」

「……。」

私が戸惑っていると、彼女は部屋の隅にあったヘルメットを持って、トントんと叩いてみせた。

「ど」行くのかは、決まってるでしょ？ エシユナイダルまで、送ってあげるわよ」

ジョエルの家から少し下山したところに、バイク置き場があった。そこにはちゃんとした道路があり、運転に問題ない程度には整備されていた。

私が登ってきたのは登山道だったが、こちらは交通の便として利用されているようで、エルシスに行くにはこれが一番近いらしい。

アリッサはバイクにまたがると、バイクの後ろを合図する。どうやら、後ろに座れというらしい。ララを抱えながらなので、少し恐怖感があるが、私はそこに座る。

「さて、行くわよう。そこに足乗せてね」

彼女は下を向いて足場を指で示す。私は言われるがまま、足を乗せ、股にララを乗せて手で支えた。

バイクに乗り始めて数分が経った。アリッサの長い髪が靡いて私の顔に触れる。

「あわわわ、わわっ」

アリッサの運転はおそらく上手いのだが、山道なのでカーブが多い。自然と右と左に体が揺れるので、危なく感じる時もある。

「シアちゃん、気を付けてね。ちよつと飛ばしていくから。抱きついてくれてもいいよー」

「……ララがいるから抱きつけないです」

「アハハ、そうだったねー!」

バイクに乗った彼女は、昨日より楽しそうにおどけてみせる。バイクに乗ったアリッサは、昨日よりもイキイキしているように見えた。

十五分ほど経ったころだろうか、バイクにも慣れてきた私にアリッサが問いかける。

「ねえ、シアちゃん。結局、エシュナイダルに何の用があるの?」

私は少し間を空ける。無意識下で、気持ちの整理をつけていたのだと思う。

「……エシュナイダルに、両親がいるの。でも、両親は私のことをわからないと思う。だから、ただ両親の様子を見に行きたいの」

「なあんだ、最初の理由とあんまり変わらないんだ。でも、着いたらどうするの? また、「うちに帰ってくるの?」

アリッサがそう聞くのは、おそらく流れとしては普通だったはずだ。しかし、なぜか私は検討もつかなかった。帰ってくるのも、そこに留まるのも、私が望んでいない気がしたからだ。

だから、私はとりあえず「まだ考えてるところ」と言って、その会話を無理やりに断った。

出発してから一時間程度経ったあたりで、私はアリッサに言ってバイクを止めてもらった。

「ねえシアちゃん、本当」「」でいいの？」

アリッサが心配そうな表情で言ってくる。私ももう二十歳なのであまり年齢は変わらないと思うが、作者の悪趣味な設計のせいで、容姿が十代前半にしか見えないからだろう。

「はい。「」からは私、歩いていきますから」

私は真剣な顔を作ってみせる。作ってみせるとは言っても、できているのかはわからない。しかし、ちゃんと気持ちを汲み取ってくれたのか、彼女は諦めたように「わかったわ」と言った。

「アリッサ、あの……」

「ん、どうしたの？ 道がわからない？ エシユナイダルはあつちよ、たぶん。すぐオブリックっていう街に着くと思うわ。行ったことはないんだけどね？ アハハ」

「うん、ありがとう、あと、色々気遣ってくれて……嬉しかった」

アリッサは少し驚いて、また満面の笑みを私に向けてくる。

「「ちら」そ、シアちゃんが来て楽しかったわ！ 変なと」だけど、また家に泊まりに来てね。」

そう言っって彼女は抱き着いてくる。気分は悪くないが、思わずため息が出そうになる。

「もう、抱き着かないでください……」ラフがつぶれちゃう」

「ふふっ。あ、そうだそうだ。連絡先……」

彼女はそういって、小さい紙を取り出して、胸ポケットに入れていたボールペンで電話番号を書き込んだ。

「はい、また帰ってくる時連絡してくれていいからね？ 遠慮しなくていいから、いつでも電話してね」

私は「クリと頷いてその紙を受け取る。私が小さい声で「じゃあ……」と言っくと、彼女は「はい」と言っって手を振る。私もそれに応えて、小さく手を振りながら森の中を抜けて行った。

* * *

そこからの道は簡単だった。少し森の中を歩けば、見覚えのある風景が目に入ってくる。よく遊びに来た、湖だった。

その湖の名前を、私は知らなかった。「あの湖」と言えば、「」の目の前にある湖と伝わっていたからだ。地図を見ても水色で塗られているだけで、名前は書かれていなかった。

「あの日も、「」の湖に来る予定だったなあ」

ロボットが心を痛めるなんてどうかしてる、と思いながらも心苦しくなる。妙な自問自答を繰り返して、私は心を落ち着かせる。

気分を紛らわそうと、ララを体の半分ぐらいまで水に入れてやる。ララは私の手を力り力りと優しく引つ掻きながら、気持ちよさそうな顔をする。陸に上げてやると、しゃがんだ私の周りを歩きながら水を落としていく。

「この湖は、中心へ行くとかなり深いと父さんから聞いたことがある。絶対に中心には行くなよ、と何度も言われた。遊ぶときは、いつも足のつく場所だった。十二歳の私でもつく程度だったので、周りはかなり浅いはずだ。」

「ちっ、と……」

私は足に力を込める。屈んでまだ湿ったままのララを抱きかかえた。

あと何百メートルか行ったところに、八年前の私がいる。八年前に死んだはずの両親も、そこにいるはずだ。

会ってから、何をするわけでもなかった。というより、何も思いついていなかった。家族を逃がすのか、それとも別の方法で家族を助けるのか。まだ、何も思いついていなかった。

あと一日で、村を救わなければならない。それがどれだけ難しいことなのかは、私にも分かっていて。

「でも、やるしかないよね」

独りぞに呟いて、一歩を踏み出した。

オブリックに着くと、そこには八年前の情景が広がっていた。懐かしい気持ちを抑えて、記憶を探りながら自分の家を探す。

「あつた、ここだ……」

記憶通りに残っていた家の表札には、オールウィンと書かれていた。どうやら、それが私の姓名らしい。少し、その場で動けなくなる。

「あらっ？ うちに何か用っ？」

突然、背後から声がかかる。ビックリして後ろを振り向くと、そこには私のお母さんがいた。八年ぶりの再会に、心が熱くなるが、ぐっとこらえる。

何といえいいのか、わからなかった。家に用があるのは間違いないのだが、信用されるようなところは何も無い。それならば、と、とっさに考えた言い訳を吐く。

「猫の元気が無くて……何か食べ物を貰えませんか？」

ララを利用する事には罪悪感を覚えるが、「あらあら、それは大変ね！ 家に入ってちよっと待つて……あ、掃除してないから汚いかもなあ」とお母さんが言う。私は、ララもそろそろお腹が空いているはずだから、嘘ではない、嘘ではないと自分に言い聞かせた。

家に入ると、懐かしい風景が目飛び込んできて、目の奥が少し熱くなる。

「レイラちゃんたたいまー」

「おかあさんおかえり〜！ わっ、だれ？」

「お客さんよ、失礼なことしちゃダメだからね？」

そこには当然、「私」もいた。今日は土曜日で、学校は休みだったはずだ。目の前の私は無邪気に動き回りながら、私の顔を覗き込むように見てくる。

「んにちは」

私がそう言つと、「んにちはー！」とにかつと笑って返してくる。私の髪が珍しいのか、「水色だ！お母さん、この人水色だよ」と言つて目を輝かせる。「はいはい、そうね。失礼の無いようにね」と軽くお母さんにあしらわれた後、「私」はそれで満足したのか、とてとてと走つていった。

「ぶぶっ、あの子、もう十二なのにいつまでも子供が抜けきらなくて……そこが可愛くもあるんだけど」

お母さんは、後ろから話しかけてきた。その手には用意良く魚のほぐし身と水を持っていた。

「すいません、いきなりお邪魔してしまって……娘さん、可愛らしいですね」

そんな自画自賛をする。実際、八年もの歳月は私を私と認識させなかった。第三者のよりに感じられて、自然と可愛いという表現が浮かんだのだ。

「よく言われる。あはは」

お母さんは冗談めかしながら言う。その手に持っていたお皿を、床に置いてララを撫でる。

「の子、ララって言うんです」

「可愛い子猫ね〜、ララちゃん、ご飯ですよー」

ララは撫でられながら、「ご飯を食べる。お母さんは私の方を、何か一言を期待するよ〜」に見る。

「あ、私、シアつて言います。最近引越してきて、右も左もわからなくて」

「シアちゃんかあ。私はアイリス・オールウィンつていうの。娘はレイラで、あと、一応主人もいるんだけど……また書齋にこもりっぱなしかな」

「お父さんは研究か何かをしている人なんですか？」

私はすつとぼけながら言う。しかし、もしかしたら何を研究しているかもわかるかもしれないという淡い期待もあった。

「明察。そうなのよ。でも主人、全然部屋から出てなくて……ある意味、別居状態よね」

「あはは。冗談が言えるってことは、仲がいい証拠ですよ」

「そうかも。仲はいいからね……あ」

アイリスは私の後ろを見て少し固まる。私もそこに振り向くと、レイラが顔を出して「ちらを見ている。アイリスが手招きすると、レイラは「ちら」に来てアイリスの横に座る。

レイラは何を語るでもなく、リラを見て目をキラキラさせている。

「猫ちゃんだ！ 猫ちゃんがいるー！」

「レイラ、宿題はちゃんとやったの？」

「まだだよ！ おとうさんに手伝わってもらったの！」

「そうなの？ 私にだって教えられるの……」

「だっておかあさんは『ぶんけい』だから、算数はできないんですよ？」

「算数なんていらなのよ、この時代は国語ができればいいんだから」

「えー、じゃあ宿題しなくていいってこと？ でもやれって言ったのはおかあさんだよー！」

「ダメよ、宿題は必要が無くてもやらないといけないの。やらないと、明日は湖行けないわよ。」

「えー、じゃあがんばる！ 水色のおねえちゃん、算数おしえてー！」

「どうやら、親子の話は収束したらしい。私はレイラの中で、水色のおねえちゃんになったようだ。」

「わかった、レイラちゃん。」に宿題持ってきて

私がそう言つと、レイラはにじしと笑って、駆け足で部屋に戻る。

「ごめんね、よかったらレイラに勉強教えてあげてくれる？」

「気にしないでください、私の方がお邪魔している立場ですから。教えてあげるのも、嫌いじゃないです。」

「そうなの、じゃあ、お願いするわね。レイラも珍しいお客さんに舞い上がったちゃっているみたい」

「はい。わかりました」

なんとも、不思議な気分だ。お母さんと敬語で話して、私に私が勉強を教える。しかし、「こんなのも悪くないな、と思ってしまっ私が出た。」

しかしそれは、あつてはいけない。私はロボットで、人間の生活に入り込むことなんて、許されていないのだから。

レイラの勉強をひと通り教え終わったあと、リビングでのんびりする。そこにお父さんが入ってくる。

「あ、あなた。そちら、お客さんのシアちゃん。さっきまであなたの代わりにレイアに勉強を教えてくれたのよ〜」

「おいおい、なにか僕が悪いみたいじゃないか。今度教えるつもりだったんだけどなあ」

お父さんはそ「まで言うと、私を見て硬直する。

「なにか……?」

お父さんは完全に硬直したまま、動こうともしない。ただ私を見て、複雑な表情をしている。

「あなた? どうしたの?」

アイリスが少し大きな声で話しかけると、やっとお父さんは動き始める。

「あ、ああ。なんでもないよ。シアちゃんだったかな? ちょっといいかい、少しそ「まで」

「え、私?」

私は頭に疑問符を浮かべる。アイリスもよく意味がわかっていないようだ。お父さんはかなり顔を強張らせて、書斎の方に戻っていく。

「どうしたのかしら……シアちゃん、悪いんだけど、ちょっと行ってあげてもらえるかしら?」

「あ、はい、わかりました」

私は不思議に思いながらも、お父さんの後を追っていった。

お父さんは、書斎の扉を開けて待っていた。私は書斎に入ったことは、一度しか無かった。昔、私が書斎に入ると、お父さんが怒ったからだ。

私が部屋の真ん中に立つと、お父さんはドアを閉める。

「シアちゃんだったか……突然だけど、君は誰に造られたんだ?」

私は、お父さんが何を言っているのかわからなかった。誰に作られた……その意味が一瞬、理解できなかったのだ。

「どういう意味?」

私は素直に聞いた。そしてお父さんは、机の中から一枚の紙を私に差し出した。

そこには、ロボットの設計図のようなものが描かれていた。細身の人型ロボットだ。

その書斎には、大きな一枚鏡があった。そこに映る私の姿と、紙に描かれたものは、必然的に一致していた。

「つまり……?」

「どうい「う」ことも無い。君は、この設計図の完成形だ。そして、設計したのは……」

私は次の言葉を耳にしたくなかった。冷や汗が出るような感覚。鳥肌が立つような感覚を覚えながら、お父さんは次の一言を放った。

「それを設計したのは……この僕だ」

「ちょっと、君の体の説明をするから、少し落ち着いて聞いてくれ」
私の動きがぎこちなくなってきたのを見たお父さんが、心配するような声で語りかける。

お父さんは私の設計図を見せながら説明してくれる。体の端々に点在するスイッチの位置も、設計図と全く同じだった。

その説明が終わり、お父さんは私に質問する。

「そうだ、結局君は誰に造られたんだ？ 僕はこの設計図を他人に見せたことはない。いったい、どうやって？」

私はそこまでの経緯を説明する。私がレイフであることは言っていない。ただガイナスで造られて、造った人間は殺した。そして、タイムスリップしてきたことも話した。

「ふむ、それなら合点が行くな……もとより、君はタイムスリップに耐えるために設計されている。君の体は、立方晶窒化炭素という物質でできているんだ。立方晶窒化炭素は熱伝導効率がよく、軽く、ダイヤ以上のモース硬度を持っている。その生成は、ブラックホールの応用だと思う。圧縮すれば密度と共に硬度も高くなるからね。タイムマシン自体は結構前から発明されていてね、しかし人体ではタイムマシンに使われている、ブラックホールを通過するのに耐えることができなかったんだよ。そのために造られたのがタイムマシンに耐えうる物質、つまり立方晶窒化炭素で造られたもの。一言で言えば、自己意識を持ったロボット、つまり君のようなものだったんだ」

「そこまで言い切ったお父さんは、一仕事終えたように息をつく。

「ところで、僕は未来で君を完成させて、この時代にタイムスリップさせたのかい？ どうもおかしい。それならエシユナイダルで生まれたんじゃないのか？」

「いや、私を造ったのはあなたじゃないと思う。きつと……」

なぜ、ガイナスに設計書があったのか。それは、明日の出来事に違いない。お父さんは明日殺されて、その時に設計図を奪われるのだろう。

「きつと、あなたとアイリスは明日殺されて、設計書を奪われる。明日、ガイナスのオブリック襲撃によって」

* * *

「はあ、なるほどね。明日、オブリックは地図から消えるわけか……」

「だから、逃げて。今日中に、できるだけ遠くに」

私は躍起になってしまう。家族だけでも、と考えるのは良くないのはわかっている。しかし、ガイナス軍を止めることはできないだろう。嵐でも起きれば何か起きるかもしれないが、私にそんなことはできない。

「確かに、逃げた方が良さそうだ。娘と妻は、何とかして逃がすよ」

その言葉の含みがどういふ事なのかは、すぐ理解できる。その中にお父さんは含まれていないのだ。

「……わかった。そうしてくれると嬉しい。私はどうすればいい？」

「そうだな、君は……」

前線で戦えと言われるかと思ったが、そんなことは言わなかった。何かを考えているような顔をした後、苦しそうに「君は、自由にしてくれ」と言った。

何を考えていたかは、予想がつく。きっと、私を利用して戦争を止めようとしている。それは武力行使ではなく、平和的解決を望んでいるからこそその悩みだろう。でも結局は、私もお父さんも、それに解答は出せなかった。

お父さんはその後、車でアイリスとレイアを連れて親戚の家まで行った。そして、急用ができたと言って二人を残して帰ってきたそうだ。

「さて、僕は書類の整理をしておくよ。君はそろそろ眠っておいた方がいい。実はその体は連続駆動時間では十八時間ぐらいが限界なんだ。そっだな……明日は朝早くに起きよう」

「わかった。じゃあ、リビングを借りる」

私は睡眠時間を八時間に設定して、早かったが眠りについて。淀む視界に映った時計は、午後八時を指していた。

◇◇◇

「さて、眠ったか……」

僕はシアを書斎に移動させて、工具を持ち出す。研究専門だからあまり使ったことはないが、仮にも設計は僕だ。COVAのアーキテクチャは、嫌というほど頭に入っている。

「自己意識を持たせたのは、失敗だったかもしれない」

僕は彼女が時折見せる、悲しそうな顔に感情移入していた。それは僕たちを、本気で哀れむ顔だ。人間的な表情が作れるだけで、人形はこどもも簡単に人間になる。

「本当に、本当に、悪いと思っているんだ。すまない……」

僕は何度も謝る。罪悪感からだろう。それが誰に向けた謝罪なのかが、もうわからなくなっていた。

午前四時、予定通りに起き上がる。

体の感覚が繋ぎ合わされるような感覚は、まだ慣れることができない。それ以上に、昨日よりも気持ち悪く感じた。

「やあ、おはよう。僕ももう準備は終わったよ。色々と、ね」

お父さんは眠そうな目をしながら、意味深な言葉で私に眩きかける。そしてコーヒーを「一気に流し込んだ。」

「おはよう」

私起き上がって、とりあえずソファに座る。しかし、特にすることがない。家には静かな空気が流れていて、考えるのには最適な環境だった。

「君は、どうしたい？ いや、どうするべきだと思っつ？」

お父さんが私に話しかける。曖昧な質問だ。村を救うための方法は、ほぼ無いに等しい。

まず、最初の火攻めだ。火を全部消していくのは不可能だし、敵かどうかの判別もすぐにはつかない。それが防げれば、次の攻撃も幾分やりにくくなるはずなのだ。

「雨でも降らせることができれば……」

私がそう言つと、お父さんは少し笑う。「そうだな、そんな絵空事が起きれば、この村も救われるかもしれないな」と、諦めの混じった声で言った。

☆☆☆

お父さんは、近所の人を説得しに行くと言つてどこかに行った。少しでも多くの人を助けたいつて思つてるんだけど、ちゃんと現実を見る。そんなところは、心優しいけど物分りのいいお父さんらしいなあ。

そんな時、私は湖に来た。あの、名もない湖。

「あの日も、ここ」で遊ぶ約束だったなあ。お父さん、八年越しに約束、果たせたね」

心は痛かったけど、涙は流れなかった。私がロボットだからではなく、それ以上に強い思いがあったからだと思う。

「絵空事、か。こんな身体も、十分絵空事だと思うけどな」

私は誰に向けるでもなく、呟く。一緒にいるのは、ララだけ。

「ねえ、ララ。私のこれまでのストーリーは、結構、壮絶だったよね？」

ララは状況を分かってないと思うけど、ニヤーと返事してくれた。

「だから、もう一回ぐらい、絵空事が起つてくれないじゃないかって、思っんだ」

「私が蝶のように飛ばたいて雨を降らすの。そんな絵空事が、起きたらいいのに」

家から持ってきた首輪。犬も猫も飼ったことないのに、昔から壁に掛かっていた首輪。理由は知らないけど、今はそんなこと、別にいいかな。

「元気でね、ララ」

私は首輪をララにつないで、ヒモを木にくくりつける。誰か、拾ってくれたらいいな。ララはくすぐったいからかな。甘えるような声でニヤーって言う。やっぱり、全然わかってないんだなあ。

「私の意識は、どこに飛んじゃうのかな。私はあつてはいけない存在だから、やっぱり消えちゃうのかな」

今日の雲は、東から西へ。この湖は、村の東にあるんだ。そんなこと、気にしたことはなかったんだけど。

「みんな、優しくかったな。私はロボットだけど、ほんと、もうちょっと……」

それ以上言つと、信念が崩れちゃう気がして、私はぎゅっと口を閉じた。もういいんだ。絵空事でもいいんだ。だから、絶対にバタフライ・エフェクトを起さすんだ。

「やっぱり、故郷を守りたいな」

私はゆっくりと、湖の中心へ。足がつかなくなるけど、なんとか泳げてる。溺れたら溺れたで、それでいいんだけどね。

私はゆつくりと、スイッチに手をかける。設計書は何回も見直したから、間違っていないはず。それは言わずもがな、自分を殺す、唯一のスイッチ。

私の想いは「湖の水に移って、空に浮かんで雲になって飛んでいく。雲に乗ってみたい、なんて無邪気な自分が懐かしいなあ。」

「最後ぐらい、泣いてもいいよね」

私のその言葉は、湖に沈んでいって、涙が流れても、すぐ混ざってしまう。

そして、私がスイッチに力を入れたとき。ララと、私の方を見て微笑む、お父さんが見えた気がした。



「ふう……」仕事終わったな。我ながらいい出来栄えだ」

「その後、どうなるのかはわからない。ただ、不吉なきの「雲が上空に出来る。僕にできるのは、「」までが限界だ。」

あとは、僕の出る幕じゃない。いや、僕に「」できる「」ではない。

誰の目にも、「」の現実が、絵空事のように映るはずだ。

「どうなるかは、相手に任せるしかないな」

僕は、陸に上げた少女の身を抱え上げる。僕がスリープモードに移行するように。プロゲラムしたその体は、物凄く軽かった。

「……ごめんな、レイア。でも、娘がどんな「」と考えてるかぐらいは、父さんには読めるよ」

ララは勝手に木に結ばれたひもを解いて歩いてきた。

「こんな緩かったら、勝手に逃げるんじゃないか。やっぱり、まだちゃんと見守らないとな」

僕はララを連れて、森を抜ける。家に着く頃には、土砂降りの雨が降っていた。

「……あれ、私……」

目を覚めます。感覚は、いつもと違ってスッキリしている。そこは見慣れた風景、オールウイン家のリビングソファの上だ。自爆スイッチを押したはずなのに、身体に何の障害もない。

「あ、水色のおねえちゃんがおきた！ おとうさん！ おきたよー！」

「おお、起きたか。あと、レイア。今日からシアは家に住むんだから、お姉ちゃんでもいいんだよ」

「はーい！ おねえちゃん欲しかったからうれしいなー！」

「えっ……私は「」の家に住む？ 戦争はどうなったの？ 村は？ 今は何時？」

私は混乱する。何が起きたのかわからない。なぜ今「」の家の中にいるのか、「」までの経緯がさっぱりわからない。

「シア、説明するのは面倒だから、後でちゃんと説明するよ。そうだな、ニユースにもなってるから、それでも見るよ。」

私はテレビのリモコンに手をやる。机の上に置かれているお母さんがめくっていた日めくりカレンダーは、8月16日になっている。

『昨日未明に起こったオブリック湖の爆発で、ガイナス軍がエシュナイダルに降伏した』

ニユースでは、そんなことが語られている。一瞬で雲が形成され、煙があがり、上空に一直線の光が射す。その神がかりな光景に、ガイナスが恐れをなしたらしい。

「うまく、いったんだ……」

そう。全てが上手くいっていた。ただ、私が生きている理由がわからなかった。

「おねえちゃんとララちゃん、家族がいっぱいふえたね！」

レイラが無邪気に飛び跳ねる。嬉しそうな顔に、私も顔が綻んだ。

☆☆☆

その後、お父さんの書斎に呼ばれた。

「色々、よく分かってないと思う。だから、説明するよ」

お父さんは、一昨日、私が寝ている間に爆弾を抜き取った。それは電気を利用した、疑似核爆弾。そして、それを私の体の外側に取り付けた。

体に取り付けたのは、爆弾だけだと電気の供給が安定しないかららしい。幸い私の体は核爆発に耐え、陸に打ち上げられた。スイッチを押した瞬間に、スリープモードに入り、爆発が起きるようにプログラムを再構築し直したそうだ。

「めん、先に言っておくべきかどうか迷ったんだけど。でも、逃げてほしいとも思ってたから、あんまり言えなかったんだ」

「なんで、私が湖に行くってわかったの？」

普通の質問だと思うんだけど、お父さんは、私を見て、子供みたいに笑う。設計者だから心が読めるのかな、なんてことなのかな。

「知ってるかい？ その体の型番」

私は「クリと頷く。記憶力だけはいいんだ。

「C-C-1-A、だったはず」

「そう。そしてその名前は、Cubic Carbon nitride Iris Alwynの頭文字を取ってる」

私はまさか、と思う。それなら、その考えが正しければ、お父さんは。

「わかったかい？ そう、僕の妻、アイリス・オールウィンの血が通ってないと、体に『適合』しないように作ってある」

ずっと、分かっていたんだ。お父さんは、私が私であることを。私を一目見たときから、候補者は二人しかいなかったんだ。

「湖に行くって、約束してたからね。おかえり、レイア」

お父さんは、優しい声で言う。すると私の心の奥に眠っていた想いが、左目から水となって溢れる。ロボットは、意外と簡単に、人間になれるのかもしれないなあ。

「うん——たがいま、お父さん」

思ってる以上に、ひしゃげた声。でも、そんなことはもう、どうでもいいんだ。

私はこの世界に生まれて。
こんなふうには、涙を流すことができて。
帰るべき場所が、ここにあつて。
そして――。

――私の世界を、家族を、守れたんだから。

Fin